

香春町協力隊だより



先月はDIY講座でリノベーションした村井宅1Fにて開始予定の「香春町トライアルウィーク」の受け入れ準備に奔走しました。

「トライアルウィーク」とは都市部から短い間、田舎暮らしを体験してもらうイベントです。

今回は東京、名古屋、福岡市から3組が11月上旬から12月にかけてそれぞれ1週間から10日ほど香春町に滞在。田舎での暮らしや仕事の方法を体験してもらいます。



移住と交流の場づくり担当

ムライ ユウキ
村井勇輝隊員 FROM KASHIWARA, OSAKA

また、採銅所地区の住民として採銅所小学校運動会の「5・6年生種目 借り物競争～リオに私を連れてって」に、借り物役として参加しました。

競争では生徒さんの足の速さに追いつけず、体の衰えを痛感しながらゴール。

また、大阪では競技後の万歳三唱や号令に対する返事が「やー！」ではなく、新鮮で異文化に触れたように感じた瞬間でした。



空き家活用担当

FROM UKIHA, FUKUOKA
テシマ ジュンヤ
手島順也隊員

先月は福岡市であった「第1回地域おこし協力隊起業支援セミナー」に参加。セミナーでは「地域商品のプロデュースしてヒット商品を作る」というテーマで基調講演があり、自分達の業務にどう応用させていくのか？という観点で聞きました。

ヒット商品の作り方は空き家の価値の高め方と似ているところがあると思います。空き家の良い面を高める工夫や、その家での暮らしぶりをイメージさせ

る見せ方や提案の仕方に応用ができると感じています。

また、福岡県内の協力隊が30名近く参加しており、各市町村の状況や協力隊の活躍を聞いて刺激を受けました。



▲セミナーでの基調講演の様子

先月は香春町合併60周年記念のプロモーションビデオを制作。インタビューさせてもらった方が香春町に対する各々の愛情をカメラ越しに表現してもらい、制作のやりがいがありました。

編集作業はかなり大変で、町の広報担当の中村さんと「あーでもない、こーでもない」などと言い合いながら共同でインタビュー動画の切り貼りや資料写真の選択。また、PVに合うBGMの選択や、字幕を話し手

に合わせて作成、表示することなどの作業は特に大変でしたが、より良いビデオを制作する為に力を合わせ作業しました。

制作したPVは動画共有サイトYouTubeでも見る事ができます。



▲プロモーションビデオの一場面



移住希望者への情報発信担当

ハマダ ヨシタカ
濱田雄飛隊員 FROM KURE, HIROSHIMA



フェイスブックでも香春町の情報や私たちの活動を発信中！「いいね」やどんな情報を発信してるか見てください。スマートフォンで左横のQRコードからもチェック！
<http://www.facebook.com/iheartkawara>

編集 / 香春町地域おこし協力隊 香春町役場まちづくり課 ☎ 32-8408



「炭坑と失業者の町」を音楽と祭りの力で変える試み ——福岡県田川郡香春町香春「オザシキオンガクフェスティバル」

文／大石始

「筑豊」という地名を聞くと、ネガティブなイメージを持つ方も少なくないことでしょう。僕も土門拳撮影による写真集「筑豊のこどもたち」(昭和35年)や映画「青春の門」シリーズで伝えられてきた「荒廃した炭坑の町」というイメージを最近まで引きずっていたものでした。

そうした印象が一転したのは2年前、「炭坑節」でも歌われている香春岳の麓に広がる香春町の盆踊りを取材させていただいて以降のこと。そこで触れたのは、新盆のお宅を回る香春独特の盆踊り文化であり、古代より朝鮮半島や中国と密接な繋がりがあったという歴史の厚みであり、そして何よりも、その土地に住む人々の優しさとエネルギッシュな魅力そのものでした。2年前の取材以降、僕にとっての田川とは「荒廃した炭坑の町」ではなく、全国的に見ても極めてディープな盆踊りの文化が息づく土地であり、大好きな人たちが住む特別な街になったのです。しかし、過疎や高い失業率で苦しむ現状は田川の紛れもない現実。そんな故郷を音楽の力で変えるべく昨年からスタートしたのが、「オザシキオンガクフェスティバル」というDIYフェスです。10月15日にそのフェスが開催され、光栄なことに僕も祭り映像上映&DJで出演させていただきました。

「オザシキオンガクフェスティバル」実行委員代表の大石勇介さんと竹野大喜さんは数年前に田川に戻ったUターン組。2人ともDJとして活動してきたこともあって、それぞれの活動のなかで培ってきたネットワークを活かし、九州を中心とする各地で活動するアーティスト/DJが出演しました。会場はもともとユニクロの店舗だった場所。体育館ほどの広さの会場に畳を敷き詰め、そこに2つのステージとさまざまなブースが立ち並ぶ光景はまさに「新しい街。」大石くん&竹野くんたちと地元の人たちが協力しあいながら、何もなかったガランとしたユニクロ跡地にひとつの祝祭空間を作り上げてしまったわけで、そこまでの苦労は僕などの想像を超えるものだったはず。また、主催の勇介くんたちと地元の人たちとの間を繋ぐ重要な役目を果たしていたのが勇介くんやスタッフのご家族だったことにもとても感銘を受けました。「若者たちのための音楽フェス」というよりも「家族ぐるみの地域の祭り。」それゆえに2回目の開催にして、早くも田川の風景にすんなり馴染んでいたように僕の目には写りました。

祭りの最後を飾ったのは、2年前に取材させていただいた香春町の盆踊り団体のみなさん。地元のおばちゃんもパンクスも子供も酔っぱらいもひとつの輪になってグルグルグルグル。踊りの輪が止まったあと、ひとりの女性がポロポロと涙をこぼしながら「いい祭りでしたね」と僕に一言、僕もその言葉で涙腺崩壊です。盆踊り後のあの感動はまだちょっと言葉にすることはできません。集う人々の熱量と手作りならではの破天荒なおもしろさ、鳴り響く音の逞しさ。胸の奥がカッと熱くなる感覚を「オザシキオンガクフェスティバル」でも感じることができました。

祭りが終われば、あの空間に集う人々も各自の「ローカル」に戻り、今頃それぞれの活動を再開させているはず。僕もすぐに締め切りに追われる生活へと戻ったわけですが、「九州にはオザシキオンガクフェスティバルを共に体験した仲間たちがいる」という感覚が僕のなかで失われることはないでしょう。自分たちの足元を自分たちなりのやり方でおもしろくしている人たちと繋がりがながら、自分なりのやり方で少しでもこの世界を色鮮やかなものにしていくこと——それこそが僕の本当にやりたいことなんだと再認識させてくれた「オザシキオンガクフェスティバル」。あの奇跡的な瞬間を共有したすべてのみなさんに感謝。また一緒に踊りましょう！

注釈:協力隊が着任した頃より関わっていた「オザシキオンガクフェスティバル」が無事終了。今回、出演された大石始さんが寄稿されたエッセイを大石さんのご了承の元、協力隊の活動新聞にも掲載させていただいています。記事のスペースの都合により原文を一部編集し掲載しております。



町内で使われていない家屋、土地をお持ちの方は、空き家バンクへのご登録をお願いします。
問：香春町役場住宅水道課 ☎ 32-8403